〈表紙解説〉㊶

松の木 muison-so

現代アートの現場から

高階秀爾

光がある。煤煙で濁ることもなく、埃で汚されることもない澄んだ無垢の光。白と黒だけの色のない世界に、早春の小鳥の歌のような爽やかな光が溢れる。

一見したところ、画面は大小さまざまの墨の点を滴らせた抽象模様のように見える。大きな塊りはまるで雪の上の動物の足跡のようであり、微細な点の連りは蟻の行列を思わせる。しかしそのなかでのびやかに伸びる描線に眼をとめると、乱雑に散らばっていると見えた点は葉叢となって秩序づけられ、枝ぶりの豊かな樹木の姿が立ち現われる。同時に、白地の部分は遠くに拡がる空となり、空気が流れ、光に満ちた空間が生まれる。それは、墨による新しい世界創造と呼んでもよいだろう。

この作品は、大原美術館が児島虎次郎の昔のアトリエを利用して、気鋭の芸術家を滞在制作に招くARKO（アーティスト・イン・レジデンス・クラシキ・オーハラ）プロジェクトの成果のひとつである。浅見貴子は、二〇一〇年三月から六月まで、倉敷に滞在して制作に励んだ。アトリエは町の中心からやや離れた自然のなかにある。制作は、モティーフとして選んだ松の木を丹念にスケッチするところから始まった。一本の枝の伸び具合い、一枚の葉の向きをもおろそかにしない徹底した写生は、「樹木の構造を把握するため」だと浅見は言う。とすれば画家の視線は、必然的に、かたちそのものよりも、樹木の存在を成り立たせる周囲の空間との関係、かすかな風のそよぎや、明るい光の照り返しに向けられることになるだろう。いわば樹木のかたちに引きずられて、空間が立ち上って来るのである。

写生が一段落すると、全体の構図を定めて、画面の裏から順次墨を置いていく。下塗りによってカンヴァスと絵具の層が分離させられる油絵の場合と違って、和紙に濃墨という手法では、墨は、時にわずかな滲みを伴って紙面の奥にまでしみ込む。点であれ線であれ、一度置かれた墨の跡は消し去ることができず、描き直すことも不可能である。裏から描くという浅見独自のこのやり方は、表面から見た時の微妙なニュアンスの効果も含めて、当初から明確なイメージを保ち続け、それを的確に実現する卓越した技術の裏づけがなければ、成果は望めない。明るい光と爽やかな空気が息づく清新な風景を生み出したこの作品は、たしかに一人の傑出した才能の存在を物語っているのである。

（たかしな・しゅうじ　大原美術館館長）